

翔べ！
世界へ

国際映像ビジネスの 最前線で活かされる UWCでの経験

次に戸惑ったのはやはり英語である。日本では英語が得意であったとはいえ、所詮日本の学校英語レベル友人、先生が話す言葉の全てが英語という環境にいきなり飛び込み、思うように言いたいことが言えなかったり、授業の内容がよく分からなかったりと、着いた当初はストレスが溜まった。しかし、そんなストレスは大切な友人、そして先生との出会いで解消された。言葉の問題さえなければあとは生身の人間同士、しかも同年代である。人間関係の悩み、将来の進路、恋人との関係などルームメイトや他の友人と語り合ううちに、真の友情が生まれた。また、日本最^び盾で日本語を話すカナダ人の先生とも何でも悩みを話し合えるような関係を築くことができた。

このような人たちと語り合ううちに、自分の気づかないところで英語力もアップし、気がついたら「自分が英語を話している」ということを意識しないうらい自然と英語が話せるようになっていた。言葉のハンデイを乗り越えた二年目は勉強の方も厳しくなったが、課外活動も充実し、本当にアツという間に過ぎてしまった。ピアソンで出会った友人や先生との交流は卒業後一〇年経とうとしている現在も続いている。

イギリスでの大学生活、
就職そして国際映像
ビジネスの最前線へ

ピアソン・カレッジを卒業後は、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）に進学し国際関係学を専攻した。そして、三菱商事を経て、二〇〇〇年一月からは現在勤務するギャガ・コミュニケーションズで映像メディアの版權を扱う仕事に従事している。仕事の内容は主に海外の映画製作会社から映画放映権を買い付けて、買い付けた映画を日本で公開するというものである。海外の顧客との交渉が多いが、UWCで培った「人とコミュニケーションする能力」がさまざまなビジネス交渉で役に立っているのは言うまでもない。これは「交渉術」といわれ、小手先の手段ではなく、「相手の立場を理解しながら自分の意見を述べ、最終的に双方が満足する解答を見いだす」という、言うのは簡単だが実行するのが難しいプロセスである。私はUWCでの留学経験を通じて、英語力だけではなく、コミュニケーション能力を高めることができたと思っている。今後も映像ビジネスを通じて、世界平和と国際理解の促進に貢献していきたい。

正論

《創刊28年記念号》

テロ戦争総力特集

仁義なき文明の激突

グラビア&本文65ページ! 福田和也^{ほか}

●電話で/0120-34-4646

●FAXで/03-3241-4281

産経新聞社へ

定価680円

(税込み)

11 月号

お問い合わせは

裸身になった和魂 西尾幹二/山崎拓幹事長は天使か
悪魔か 櫻田淳/中曽根政権を支えた元官房長官が明かす靖国参拜の“舞台裏” 藤波孝生/対
談・塩川正十郎大臣、劣化した戦後日本を叱る! 塩川正十郎vs村上兵衛/大人はなぜ子供に“勇
気”を教えないのか 曾野綾子/対談・貧しいが皆燃えていたあの頃 秋山庄太郎vs山本富士子

島田和太 しまだ かずひろ

(株)ギャガ・コミュニケーションズ

UWCカナダ・ピアソン・カレッジ(カナダ、1991~93年)。96年6月ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス国際関係学部卒業、同年7月三菱商事入社。2000年1月より現職。



1993年2月にピアソン・カレッジの友人たちと(後列左から3人目が筆者)。

いざカナダへ!

成田を出発して、シアトル、バンクーバーと飛行機を乗り継ぎ、目的地であるビクトリアに着いた時には日本を発ってから既に一五時間が経過していた。一九九一年九月、一六歳の私は期待と不安が入り交じる複雑な心境で初めてカナダの地を踏んだ。ビクトリアは晩夏の青空が広がっていて、長旅をいやしてくれるようなさわやかな気候だった。「これから二年間どうなるかわからないけど、とにかく頑張ろう」と自分に言い聞かせながら迎えのバンに乗り込んだ。

私が海外留学を意識するようになったのは、中学校で初めて英語を学

び、異国の人とコミュニケーションをすることに漠然とした「喜び」を感じた頃だった。幼少の頃の海外経験は全くなかったが、海外に出ていろいろな人と話したり日本のことを海外の人に伝えたりしたいという純粋な希望は強かったと思う。そして、そんな希望を二〇%かなえてくれる機会を提供してくれたのが

United World College (UWC)であった。世界約七〇カ国から集まる同年代の生徒たちと二年間勉学と生活を共にする。しかもフルスカラーシップ(奨学金)付きである。経団連から送られてきた募集要項を読んだ瞬間に、私は「これだ!」と飛びついた。内容を読んで驚いたのは、UWCが提供するカリキュラムの充実度である。国際バカロレア(IBC)という世界的に認められている学業資格の取得に向けて授業が進められ、勉強だけではなく社会奉仕活動や課外活動も必須科目となる。授業の内容は日本の高校のそれとは一八〇度

違い、暗記はほとんどなくディスカッションを中心に「考える」ということに重点を置いた教育方法である。さらに、UWCの基本理念として、*International Understanding*、と

いう言葉がある。世界各国から集まる生徒と共に学び、生活すること

によって国際理解を深めようということである。この精神はごく基本的なことであるが、冷戦後も世界各地で紛争が絶えない現在の世界でわれわれが再認識しなければならぬ考え方だと思ふ。

話を戻そう。無事選考試験を突破して、第一希望であったカナダのピアソン・カレッジへの派遣も決まった。他にイギリス、イタリア、アメリカ、シンガポールもあったが、カナダを希望したのは実は「他の学校と比べて食べ物が一番おいしい」ということをある人から聞いていたからである。そしてその期待は裏切られなかった(ピアソンに派遣される女の子は二年間で平均一〇キロ太るという噂もある)。

友人・先生に恵まれ、充実したカナダでの二年間の生活

ピアソン・カレッジに着いてまず驚いたのがその学校の様子である。学校は森の中にあり周囲には海と木しかない。そして建物は全て木造建てで、一見サマーキャンプ場ではないかと勘違いしてしまうほどである。しかし今から思えば、海や山などの美しい自然に恵まれた環境の中で二年間も過ごせたというのはかなり贅沢なことであった。